

12 番 富 田

受付番号8番、質問議員12番、富田陽子です。

件名、「安心して出産できる環境づくりを」

要旨、今年3月、神奈川県立病院機構、神奈川県、小田原市より神奈川県の医療構想に記載の県西地域の医療に対する課題解決のための「小田原市立病院と県立足柄上病院との連携・協力の方向性」が示され、足柄上病院の分娩機能を小田原市立病院に集約化する記載があった。

現在も既に、新型コロナウイルス患者受入れ体制のため、産科を休診、院内助産中止に伴い、妊婦検診も行っていない。町内には産科の病院もなく、当町から一番近い足柄上病院での産科・分娩機能の廃止による小田原市立病院への集約化は、物理的距離により出産のリスクも上がる。当町で出産し子育てしていきたい若い世代にとって、不便を強いられ不安になると考える。

また、足柄上病院で行われていた助産師による院内助産は、畳の上での妊婦に寄り添った自然なお産を促す分娩スタイルで、産後のケアも手厚いことから、存続希望の声も多い。

若い世代の移住の促進、子育て支援に注力している当町にとって大変致命的であり、少子高齢化、人口減少にますます拍車をかける危機的状況である。

町の方針に対し、足柄上病院の産科、院内助産存続の県への要望、町独自の妊婦へのサポート、1市5町広域での助産院の誘致など、安心して出産できる環境づくりを早急に整備すべきではないかと考え質問する。

- 1、県の方針について町の見解は。
- 2、県へ足柄上病院の産科、院内助産存続を要望していく考えは。
- 3、安心して出産しやすいまちにしていく新たな施策は。
- 4、移住者はどこでどのような出産ができるのか情報に乏しい。

移住者、若い世代向けに産科、各医院の出産サポート、費用等の一覧を作成しホームページに公開したり、配布しては。

以上です。

議

長

答弁願います。

町長。

町

長

それでは、富田陽子議員から「安心して出産できる環境づくり」について

の御質問をいただきました。

初めに、私は、人口減少と高齢化が急速に進む中、将来にわたり県立足柄上病院が安定した医療を提供していくためには、公立病院である小田原市立病院との連携が重要であると認識しております。

この公立2病院については、足柄上病院が病院機構第3期中期目標の達成、小田原市立病院が施設の建て替えという課題を抱えているため、本年3月に小田原市立病院と県立足柄上病院との連携・協力の方向性について、小田原市立病院、神奈川県、県立病院機構の3者の協議がまとまり、基本協定を締結したところでございます。

この基本協定の内容は、2病院で同じ機能を有するものを分散化するとともに充実強化し、お互いの病院が連携し、協力していくこととなっており、足柄上病院が担う分娩については、足柄上地域における分娩可能な医療機関の状況や医療ニーズを踏まえて、小田原市立病院に集約化されることになりました。

まず、1点目の御質問の「県の方針についての町の見解は。」についてですが、今回の基本協定に当たり、神奈川県と県西地域2市8町で意見交換会を重ねてきたこともあり、方針については、おおむね理解しております。

しかし、議員御指摘の分娩機能を小田原市立病院へ集約することについては、最後まで反対しましたが、産科医不足や医師不在の中での医療事故等を考えると、受けざるを得ない状況となってしまいました。

次に、2点目の御質問の「県へ足柄上病院の産科、院内助産存続を要望していく考えは。」についてですが、足柄上病院の分娩につきましては、今までも産科医不足により2005年度に分娩予約を一時休止しました。その後、助産師のみで対応する院内助産を導入しましたが、医師が行う処置なしでの分娩は非常に少ない状況となり、助産師だけでは対応できる件数も限られていました。

また、昨年、新型コロナウイルス感染症の重点医療機関として指定されて以降、事実上分娩停止状況となり、小田原市立病院に集約されている状況でございます。

現時点では、機能集約については、やむを得ないものと理解していますが、足柄上地域1市5町間では、県に対して足柄上地域の分娩可能な医療機関の数や、地域の分娩数などの状況の把握を常にお願いとするとともに、必要に応じて足柄上病院の分娩再開を検討することを含めて、要望を続けていきたいと考えております。

次に、3点目の御質問の「安心して出産しやすいまちにしていく新たな施策は。」についてであります。町では、健康福祉センターにおいて「子育て世代包括支援センター すこやか」を平成29年に開設し、妊娠期から子育て期にわたる母子保健や育児に関する様々な悩みに対し、保健師などの専門職が相談支援を行い、必要なサービスを円滑に提供できるよう体制を取っております。

また、令和2年度から、新たに保健師による妊婦訪問を妊娠後期に実施するなど、出産への備えや心配事、体調などを確認し、相談できる体制も整備しております。

また、出産後の健診を安心して受けていただくため、産婦健診費用の補助も行っております。

次に、4点目の御質問の「移住者はどこでどのような出産ができるのか情報に乏しい。移住者、若い世代向けに産科、各医院の出産サポート、費用等の一覧を作成しホームページに公開したり、配布しては。」についてであります。現在、移住者を含め町内にお住まいの妊娠された方からは、出産に係る情報提供の相談は、ほとんど受けておりません。妊娠された方は、御自身で医療機関を決められているようですが、御質問のとおり、出産ができる医療機関の紹介などの情報提供は、必要であると考えております。

今回の「安心して出産できる環境づくり」につきましては、町が取り組んでいる定住促進につながることを思いますので、医療機関の情報も含めて前向きに取り組んでいきたいと考えております。

議 長 12番、富田陽子議員。

12 番 富 田 今、御回答いただきましたけれども、神奈川県と県西地域2市8町で意見交換を重ねてきたこともありという回答の中にありましたけれども、この件については、突然、この3月に発表されたことではなくて、何年もかけて議

論を重ねられて、今回の結論に至ったんだと聞いていますが、詳しい経緯をお聞かせください。

議 長 保険健康課長。

保 険 健 康 課 長 こちらの件につきましては、2市8町が、県が入りまして、市町につきましては、県西地域の行政の副市長、副町長そういった方と地域の医療関係者、そういった方を構成員にしまして、意見交換会を昨年2月から、そのお話がありまして、3回程度開催してきました。そこで、小田原市と小田原市立病院と県立足柄上病院の協力について、どうしていったことが一番いいのかというような議論を重ねてまいりました。

議 長 富田陽子議員。

12 番 富 田 神奈川県議会の議事録の中では、平成28年にはしきだ議員が、また、平成29年には杉本透県議が上病院について質問を行っており、知事の答弁では、「現在、足柄上地域の自治体に対し、上病院の現状や課題、あるいは今後の在り方を検討する意義や必要性を丁寧に説明する。県としては、地域とともに考えていくこと、地域の信頼や御理解いただくことが重要と認識しているので、会議という形にこだわらず意見を伺っている。今後はより議論を深めていくため、御提案のあったあり方検討会の立ち上げも含め、引き続き地域に働きかけてまいります」という答弁が議事録の中にあっただけですけども、このあり方検討会というものが、この意見交換会というものであったということで、認識でよろしいのでしょうか。

議 長 保険健康課長。

保 険 健 康 課 長 そうですね、そういうことであると思います。

議 長 富田陽子議員。

12 番 富 田 じゃあ、この意見交換会の中で山北町としては、この分娩機能を集約することに対して反対は行ったけれども、県西地域2市8町で足並みがそろわず、こういう結果になってしまったということでしょうか。

議 長 町長。

町 長 御案内のように、もう10年以上前から産科の問題、足柄上病院の産科については、お医者さんがいないというような問題が生じておりました。一時的には休んでしまったり、また、そういうようなことで、なかなか先生が集ま

らなかったというようなことがあります。

それに対して、1市5町では常に何とかそれを存続してほしい、また探していただきたいというようなことでやっておりました。

今回は小田原市立病院の建て替えというようなことと、病院機構の関係の中で突然こういう話が来まして、我々としては、かなり長い間いろいろ協議してきたんですけど、ざっくりばらんに言えば、反対したのは、山北と松田と中井町ということで、3町については、1市2町についてはやむを得ないというような判断でしたので、やむなくこういうような状態になりました。

実際には、まだその施設そのものは撤去されておられませんので、再開はできるような状態にはしてありますけど、当然、今度は足柄上病院のいろいろな建て替えというんですか、そういったようなことも起きてきますんで、そういったときにも、また同じようなことが起こるのではないかというふうに考えています。

議 長
副 町 長

副町長。

意見交換会のときに私も何回か出席させていただいたんですが、町長の意向を受けて、今言った3町の山北、松田、中井ですが、副町長を中心に元の原案に対して、分娩というのを、これを白紙撤回させたということが何回かありました。

ですが、どうしても、やっぱり今富田議員が言われるように、足並みがそろわないんです、2市8町の中で。その中で上病院は山北にありません。松田町に、今御存じのようにありますけれども、分娩機能も山北もないんで、ぜひ存続させてほしいということで、何回かそれを申し入れまして、撤回してもらったということはありません。これは町長の指示もあったんですが、その辺のところ、ですが、もうどうしても要するに課題がいくつかありまして、その辺で、約束の中では何か機会があったときには再開するような形のメモを残した中で、やむなくということでございますけれども、我々がいいとは思っておりませんので、その辺は御理解いただきたいと思います。

議 長
12 番 富 田

富田陽子議員。

その辺の状況は、大変理解いたしました。

私も聞いている情報ですと、病院という大きな施設を運営していくのに、か

なり経営的な負担が大きい。上病院は特に令和元年度の決算では、営業損失は8億2,400万、経常損益は7億6,700万ということで、かなり財政的には厳しいということも聞いておりますし、出産件数も減っているのもその一つの要因かなとは考えているんですけども、1市5町で足並みがそろわなかったというのは、大変残念な結論ではあるんですけども、例えば、その1市5町が足並みはそろわなかったとしても、この県の方針を無条件といいますか、何かこの条件をつけて、やむなくこう了解するみたいな、そういうことはできなかったんでしょうか。

議 長 町長。

町 長 条件というんですか、まあ要するにその再開しないというようなことは、撤回させましたんで、再開の可能性は残ってるということでございます。そういったような意味では、本来であれば、統合するんですから、直ちに産婦人科病棟を閉鎖とか、ほかのものに利用するということはできるんですけど、あくまでそれについてはそういうふうにならないで、要するに、再開の道を残すということにはやりましたけども、そこが精いっぱいございました。

議 長 富田陽子議員。

12 番 富 田 この医療ニーズを集約化させた、医療ニーズを踏まえて集約化を図るという、これは町長にお伺いしても、本当は県に伺うことなんでしょうけれども、この医療ニーズということはこの足柄の町域でどれだけニーズがあったか、どういうニーズがあったかということは、丁寧にこれは調査をされてきたんでしょうか。

議 長 町長。

町 長 細い、何というんですか、個々のニーズまでについてはあれですけど、数字的なことは、もう何年間にわたって我々も説明を受けましたし、また、そういったようなことをやりました。要するに1市5町の分娩数自体は、確かに下がってますけど、そこのところだったら、仮に上病院みたいな一つのところが全部来ていただけるならやっていけるわけです。

しかし、皆さんのニーズはどちらかというと、半分以上の方は、小田原市であったり、民間のところへ行きたいというようなニーズがありますので、だんだん、だんだん、例えば半分では3分の1ではできない。だんだん、だ

んだんそういった悪循環の中から来ていただく人が減って行って、上病院としても運営ができないというようなことが、そういったような数字的な流れで言えば、だんだん、だんだんそういうような数字が減っていったというようなことが実態だというふうに思っております。

議 長 副町長。

副 町 長 上病院と小田原市立病院の方向性なんですが、医療の集約化を図るということで、小田原市立病院では第3次医療の関係、それから上病院では小田原市立病院にはないんですが、災害のときの、もちろんそうなんですよ、小田原市立病院もそれは継続するとか、いろいろな取決めがございます。

その中で、やはり小田原市立病院でも上病院でもどちらでも両方ではあるというものは極力1か所にして、集約化を図ったというような形でございまして、これは県と、それからあと小田原市、それから病院機構、その辺のところ、いろいろ決まっていますけれども、とにかく同じことはやらないと。基本的にどちらが専門的に、同じことが必要な場合はもちろんあります。それはやりますけれども、専門的により高度の医療を提供するというのは、上病院が市立病院にない、小田原市立病院にない場合は、上病院がある場合もありますし、そういうところでめり張りをつけたということでございます。

議 長 富田陽子議員。

12 番 富 田 数字的に見ますと、小田原市立病院やその民間の施設の出産件数が多くなって、確かにそっちの医療のニーズが高くなってきていたのかなというふうに数字では捉えられるんですけども、そもそも同じことをやっていたわけではなくて、もう大分前からその足柄上病院と小田原市立病院というのは、この分娩についての連携をしまして、足柄上病院は院内助産で助産師による分娩行っていたわけで、正常分娩ができないときに小田原市立病院へ行く。小田原市立病院は、例えばその新生児の入院機関ですとか、そういうものも備えてまして、かつ上病院というのは、自然なお産を促すスタイルを行っていて、全然役割が、役割というか、その同じことを行っていたわけではなくて、小田原市立病院は先生が立ち会いの下、分娩台の上で出産をするということができてまして、上病院は畳の上で自分の好きな体勢で、助産師さんが寄り添ってくれてという、その助産師さんの手厚い出産スタイルが大変好評

だったんです。

医療ニーズがなくなってしまったのではないかと数字的には思うわけですが、私も実際、足柄上病院で平成30年に出産しました。その出産したことを上病院で出産したよ、すごいよかったよということを周りの地域の方とか、同じときに子どもが生まれた方に話したら、「え、上病院って産めたの。知らなかった。」という方がすごく多かったんです。

2005年に産科医がいなくなってしまって、一時分娩を休止してしまったということがあったんですけれども、このときの情報がまだ町民、1市5町の市民の中ではその情報のままで止まってしまっていて、再開されたことの情報がかうまく伝わっていなかったんですね。

なので、もしかしたら、もしかしたらというか、本当は足柄上病院で産みたかった方、この近くでこんな自然なお産をやっているということを知っていたら、産みたかった方は多かったと思うんです。

なので、この実際のニーズは、医療ニーズというか、上病院のニーズが把握し切れてなかったのではないかなというふうに考えます。正常分娩しか行えないというと、かなりマイナスのイメージを取られる方もいらっしゃると思うんですけれども、そこはちゃんと小田原市立病院と連携をしますし、むしろ、その自然なお産で助産師さんに寄り添ってもらえるという、そこに魅力を感じて二人目、三人目も上病院で産みたいという方はかなり多くて、そういう声はとっても多かったと思います。私の周りでも、なかなか山北町内ではそういう方と会うことはなかったんですけれども、1市5町で広げるとみるとそういう方はかなりいて、本当のニーズはそこにあったのではないかなと思うんですけれども、そういったことの調査というのはされていないですか。

議 長

保険健康課長。

保 険 健 康 課 長

2005年度に一時休止した後、2011年度に院内助産を開始しました。そういったことの町民に対してのPR、そういったことが多少欠けていたのかなとは、今思えばそう思うんですが、調査的なことにつきましては、県の保健所の上センターのほうでしておりまして、そちらの情報につきましては、町のほうにも情報が来てるわけで、そのところから妊婦さんに対しての情報

発信が薄かったのではないかというふうに考えております。

議 長 副町長。

副 町 長 情報が薄かったということは、発信が薄かったということじゃなくて、山北町は保健センターって、保健師が常駐してます。相談があった段階で、保健師はそのどこの産婦人科医が、どこの病院がどこのだと全て把握してますので、その辺は相談に乗ってくれるというふうな考え方があったということでございます。

議 長 富田陽子議員。

12 番 富 田 今回の方向性について、必要に応じて分娩再開を検討することを含めて要望を続けていきたいと考えておりますという回答があったんですけども、この県への要望をしていく以外に、何かこう、1市5町で足並みをそろえるのは、今の御回答で難しいのかもしれないんですけども、この要望以外に新たに広域でこの出産できる体制づくりに対して、新たにできることを検討していこうとか、意見交換をしているとか、そういうようなことはあるんでしょうか。

議 長 町長。

町 長 何回か首長同士で話し合ったときには、そういったような意見も出まして、基本的には1市5町で仮にそういったところにどっかできないかというような、あるいは民間を誘致できないかと、そんなようなことをいくつか考えて、実際には何回かやりましたけども、なかなかやっぱりそれについては、全てが合意ということにはいきませんでしたので、やはり個別事案としてやっていくしかないかなというふうに思っておりますので、賛成してくれるところの中で共同してできるところについては、そういうようなことをこれからも模索していきたいというふうに考えております。

議 長 富田陽子議員。

12 番 富 田 今回の方向性については、この山北町が一番ダメージを受けると思うんです。町内にはそういう施設はありませんし、一番近い上病院がなくなって、分娩機能がなくなってしまうということは、かなり町民にとって大きな負担になると考えるんですけども、一つには、市立病院は小田原市民と市外民とで出産費用というのが異なるんです。小田原市民と比べて、山北町民だと平

日だと4万4,000円、休日だと6万2,000円の差が出ます。病院までの通院距離も上病院の倍はかかります。今まで20分かかっていたところが、40分から50分かかることとなります。その40分から50分、陣痛が来てからその市立病院に行くというのも、かなりリスクは高くなると思うんです。

さらに、その出産前の妊婦健診というのは、平均して14回あります。臨月を迎えたら週一で健診を受けに行くんですけども、上病院に行くのとは、毎週、小田原市立病院へ通うというのは、かなり負担が大きくなると思うんです。この金銭的にも肉体的にもこの町内の妊婦さんへの負担がのしかかるんですけども、この小田原市立病院へ集約化するならば、この負担をもっと軽減するようなサポートもセットで何かこう受け入れて、初めてやむを得ないというふうに理解するべき。また、そういうふうに要望していくべきなんではないかなと思うんですけども、いかがでしょうか。

議 長

町長。

町

長

おっしゃるようにその件についてもいろいろ相談をしました。なかなか足並みはそろわないんですけども、それぞれの町独自でそういったようなことを当然やっていかなければいけないだろうというふうには考えておりますので、何らかの方法をやはり取りたいというふうには考えております。

議

長

富田陽子議員。

12 番 富

田

何らかの方法の一つとして、例えばその3番目の質問の問いにあります「令和2年度から新たに保健師による妊婦訪問を妊娠後期に実施するなどあるんですけども、やっぱりこういうサポート体制も、今回の方向性を踏まえた上でのサポートなんでしょうか。

議

長

保険健康課長。

保 険 健 康 課 長

こちらの訪問につきましては、昨年度から行っておりまして、直接この集約化される前から検討しておりまして、町独自の妊婦さんへ対してのサービスでございます。

議

長

富田陽子議員。

12 番 富

田

山北町は、この保健師さんが産後に自宅訪問して下さったりとか、パパママクラスで沐浴とか歯磨きとかいろんなことを教えて下さったり、あとは乳幼児ニコニコ相談・母乳相談というのも、大変お母さんと子どもに寄り

きることというのにも限られてはいますけれども、医療行為ではないにしろ、できることというのはたくさんあります。妊婦健診の14回のうち3回が診察するのはほんの数回で、あとほとんどは助産師さんが診てくださるんです。正常な出産であれば、助産師さん診てくれますし、その産後の母乳外来ですとか、育児相談ですとか、そういうことも行っているのも助産師さんです。

なので、分娩を行うのが仮に上病院で難しかったとしても、せめて、その14回のうちの医者が関わらない助産師さんの健診ですとか、あと産後の健診ですとか、そういうところの部分のみを上病院で引き続き行っていただきたいとか、その要望の仕方も可能性のある要望の仕方を行っていただきたいなと思ってるんですけども、その辺はいかがでしょうか。

議 長

町長。

町

長 了解しました。そのようなことは要望していきたいというふうには思っております。

私のほうで別の話になりますけども、助産師さんも当然同じだと思うんですけど、やはり分娩に関しては経験が何よりも大事ということで、実際に私が依頼されたのは中井町から日赤病院の中で産婦人科の問題がやはり同じような問題があるということで、そういったような先生をお願いしたいという依頼を受けまして、たまたま私の同級生がやっておりますんで、そういうとこに聞きました。

そうしたところ、若い先生はいるんだと。しかし、統括できる人が非常に少ない。つまり経験豊かな産婦人科医、助産師さんも同じだと思うんです。やはり経験が何よりもこの出産には大事だということで、若い先生とか、ただ助産師さんも経験が少ない方ということになると、なかなか難しい。

ですから、今の富田議員のおっしゃることは理解しましたので、そういう経験豊かな助産師さんが受けていただけるような状況をつくり出して、要望してまいりたいというふうに考えております。

議 長

富田陽子議員。

12 番 富 田

ぜひ要望していただきたいと思います。

実際にその上病院でお産した方の声を聞きますと、その先生の話というんは、実は一切出て来なくて、助産師さんがどんなによかったかという話をさ

れるんです。私も本当にそれは共感しまして、初めて上病院でお産したんですけど、何てこんなすばらしい職業があるんだと感動したぐらいで、最後、退院するときに助産師さんお手紙を書いて、今からでは無理なので、もし生まれ変わったらちょっと助産師さんになりたいというようなお手紙を書かせていただいたぐらい、温かく見守ってくれるその助産師さんというのがすごく妊婦にとっては心強い存在だったんです。

今回、一つ提案させていただきたいんですけれども、全国的に産科医というのが不足してますので、今後、産科医が人数が増えて、この問題が解消するとは考えにくいなというふうに思うんです。

また、妊婦さんのコロナの感染リスクというのも、かなり大きいというか、妊婦さんの負担、心労的な負担も大きいとは思いますが。先日、千葉県で37週の妊婦さんがコロナウイルスに感染して、自宅で一人で出産して、赤ちゃんが死亡という悲しい事件もありました。

一昔前は、産婆さんが自宅に取り上げてくれたという話をよく聞きます。今でいう助産師さんが自宅に来て、自宅出産ということだと思うんですけれども、その産科医不足というのは、すぐに解消されるわけではないですし、コロナの今後の終息も見通しが立たず、今後その産科ということに対して、分娩ということに対して、新たな体制を考える時期ではないかなというふうに思います。

例えば、手話通訳者はこの1市5町で登録されて、必要に応じて各町に派遣されていまして、あるいはこの子宮がん検診などの検診というのは、この専用車両が各町にやってきて検診を行ったりしていることがあると思うんですけれども、健診とかに関しても1市5町、もしくはこの山北町で助産師さんを出張、派遣するような体制というのを取れるのではないかな、取っていただけないかなという御提案なんです。

コロナ禍でこの出産時の立会いというのも、面会というのも全て今禁止で、お母さんは産んでから退院するまで、誰とも家族とも面会できないような、ちょっと不安な状態なんです。そうであるならば、大きい病院でわざわざこの出産ということにこだわらなくても、今度はもう逆にちょっと一昔前の従来のスタイルをこう見直して、助産師さんが家に来てもらって、出産を診て

もらうとか、健診診てもらうとか、そういうようなやり方も一つ今後考えていけるのではないかなと思うんですけども、そういう新たな何というんですかね、新しい仕組みというのはいかがでしょうか。

議 町 長

町長。

かなりハードルは高いなというふうに思いました。一応、一つは、出産について、自然分娩に関しては医療ではございません。ですから、片や病院で関わる前の医療とどこで線引きをするのか、どうなったら医療行為になるのか、助産師さんはどこまでできるのかというところが非常にハードルが高いなというふうに思ってます。

研究はしてみたいというふうに思っていますけども、なかなか、そのところは医療行為でないというところを踏まえますと、やはりできることが限られてくる。その何というんですか、担保が、例えば上病院であれば、それができていたわけですけど、それが派遣ということで行かれるとなると、それをフォローしてくれるところがない限りは、なかなか実際には難しいだろうと思いますので、そういったことも研究してみたいというふうに思っています。

議 保 険 健 康 課 長

長 保険健康課長。

県の保健所の調べでございますが、業務従事者届というのの調べでございます。助産師さんにつきましては足柄上地域でいいますと、南足柄市が2名、中井町が1名、松田町が1名ということで、ほかの町はゼロという結果でございました。

議 12 番 富 田

長 富田陽子議員。

なかなか厳しい状況だということは理解しましたけれども、産科医に代わる助産師さんの新たな役割というか、大きな役割というのが、大変今後大きくなっていくのではないかなと思うので、その辺を踏まえた上での県への要望なり、1市5町の取組なりを検討していただけたらなと思います。

あと、真鶴町と湯河原町では、もう町内に出産できる施設がなくて、市立病院まで行くのに海沿いの道が渋滞して、陣痛が来た後に危険だということで、マタニティ・サポート119搬送というのを平成30年から始めています。事前登録制で出産時の入院に際して必要なサポートを備えた専用車両が、

自宅から病院に送迎してくれるというサービスがあります。これも実績が毎年ちゃんとありますし、例えば民間のタクシー会社では陣痛タクシーといって、事前に予約しておけば優先的に配車をしてくれて、破水にも対応できる防水シートなどを準備している企業もあるんです。

なので、この安心してこの出産できる環境づくりの一つとして、広域での専用車両というものを準備して、その陣痛とかのあの急なことに準備したりですとか、あと民間と連携してタクシー手配、補助するようなサポートというのが、今後、その上病院の集約がされるのであれば、必要になってくるかなというふうに考えますけれども、その辺はいかがでしょうか。

議 長 町長。

町 長 おっしゃるように、様々な何というんですか、ことが考えられます。おっしゃられるように破水したときのそういったような専門車両であるとか、そういったようなことも含めまして、できるだけ出産・子育てについて、町としてできる限りのことはしていきたいと思いますので、いろいろなことを考えながら検討してまいりたいというふうに思っています。

議 長 富田陽子議員。

12 番 富 田 最後の質問を、4点目の質問で移住者、若い世代向けに産科、各病院の出産サポート費用等の一覧を作成し、ホームページに公開したり、配布してはどうかという質問をさせてもらったんですけれども、この一番の理由としては、さっきも言ったように上病院で出産できることを知らなかった方があまりにも多かったことなんです。出産を経験した身としては、この上病院のよさをもっと知ってもらいたいなと思った一人でもありますし、その移住者の一人として、私も出産するときに、どこで産めばいいんだろうということはかなり必死に、ホームページしか、インターネットでしか検索する術がなかったもので、調べた思い出が、記憶があります。助産院となっていたり、産婦人科となっても分娩ができなかったりとか、すごくその病院によってできることというのが分かれてまして、分かりづかったんです。

なので、山北町に分娩施設がないということは、かなりそれだけでマイナスイメージですけれども、足柄上病院のその集約化で、現在も既にコロナで受入れできないということもかなり致命的だなと思いますので、山北町とし

ては、この近隣にこれだけの施設があつて、病床数がこれぐらいで、町からの距離はこれぐらいだよという、そういう情報があれば、妊娠した後にその病院にかかる前にそういう情報があるだけで、一つ安心材料になるんじゃないかなと思うんですけども、こちら辺はいかがでしょう。

議 長 保険健康課長。

保 険 健 康 課 長 そういったことにつきましては、今後ホームページと等を通じて閲覧できるようにしていきたいと思っておりますので、よろしくをお願いします。

議 長 富田陽子議員。

12 番 富 田 ぜひ、サンライズやまきたですとか、これから東山北、失礼しました、水上町営住宅とか、若い世代に移住、定住してほしいと思って、そこに力を入れてる山北町にとっては、やはりその移住したはいいけど、どこで、分娩する施設が遠かったり、近くにないというのは、あれ、移住しても子育てしにくい、出産しにくいと、すごく何でしょう、ちょっとそこはがっかりしてしまうポイントだと思うんです。

移住を検討している人は、やっぱりそこをまず最初に検索すると思うんです。山北町でスペース空けて、産婦人科とか検索して、自分が移住したい町に産婦人科はあるのだろうか。そこで検索したら該当なしとなるわけですがけれども、ホームページに山北町の近隣の出産できる施設、産婦人科が掲載されていれば、そこでヒットがするわけで、そこで目に留まって、山北町にはないけれども、近隣にこういうところがあるんだなということで、そこで山北町に目を留めてもらえると思うんです。

やっぱり今後人口減少を少しでも緩やかにもしたいですし、アフターコロナを見据えた中で、やっぱり子育てする、出産できる施設、環境づくりは大事だと思いますので、そのところ力を入れていただければと思います。

以上です。

議 長 町長。

町 長 おっしゃるように、非常に最近やっぱりインターネットで情報を取るという中で、先ほどの上病院では産めないというような間違っただ情報が行っているというようなことを感じますと、やはり一番先に、この話が出たときに、我々お願いしたのは、山北町には産婦人科、今もないんですけども、当然、

その上病院がなくなることによって産める施設がないというデメリットが、
独り歩きするのが非常に怖いということを感じまして、当然、そういうこと
は起こらないように何らかの方法を取らないと、要するに誤った情報の中で
何というんですか、皆さんが反対してしまうと、移住とかそういったこと
についてもためらうのではないかというふうに思っておりますので、ぜひそう
いうようなことがないような情報を発信していきたいというふうに思ってお
ります。